



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「知的障害のある女性のライフスタイル」
Author(s)	林, 佳苗; HAYASHI, Kanae
Citation	教育福祉研究, 8, 47-57
Issue Date	2002-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28350">https://hdl.handle.net/2115/28350</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_P47-57.pdf



## 「知的障害のある女性のライフスタイル」

林 佳 苗

### はじめに

これまで知的障害のある人の生き方は社会から様々な制約を受けてきたが、今日では知的障害のある本人からの声を受けとめ、彼ら一人ひとりが選ぶライフスタイルの実現を支える多様なサービスを用意していくことが課題となっている。また、知的障害のある人自身が必要な支援を求め、選択し、決定する力を高めることも課題となっている。

本論の目的は、知的障害のある女性が豊かで自分らしいライフスタイルを実現していく上での課題を、彼女たちが抱く願いや夢、不安や不満などの様々な「思い」に沿って整理していくことにある。

知的障害のある女性のライフスタイルに関わる課題を考えていくことには、女性の生活支援上の課題だけでなく、性にかかわる問題を考えるという意義もある<sup>(1)</sup>。ノーマライゼーションの理念に基づいて、知的障害のある人の性と結婚の権利<sup>(2)</sup>をどのように保障していくかが模索されているが、地域社会の人々とともに家族や支援者の中には、知的障害のある人の性の自立や結婚に対して消極的な考えをもっている人も多い。筆者自身も知的障害のある人の教育の場で彼らの自立を支援する立場にあるが、女子生徒たちが将来の目標として「結婚」を語るとき、その願いをどのように受けとめ、支えていけばよいのかと戸惑いを感じているのが実際である。

そこで本論では、知的障害のある女性本人の「思い」に沿って、現段階における女性のライフスタイルの中の男性との交際や結婚の意味を捉えることを通して、女性の側から、性と結婚が保障されることの意義を確認し、現段階での課題を示

すことを試みる。

なお、性と結婚にかかわる支援については知的障害のある男性についても課題が大きいことは指摘されており<sup>(3)</sup>、男性本人の「思い」を明らかにしていくことは今後の課題となる。

### 1. 知的障害のある女性にとっての性と結婚

はじめに、知的障害のある女性の性と結婚がこれまで周囲の人々からどのように扱われてきているのかを、先行研究から示す。

#### (1) 知的障害のある女性の生き方と「性」

かつて日本の大家族の中では、よほどの重度でないかぎり知的障害のある人も家族に支えられ、農業に従事しながら生活を送っており、結婚した人も多かったという<sup>(4)</sup>。女性たちも農作業を手伝い、家事や子守に従事しながら家族の中で生活してきたことだろう。知的障害のある女性は同じ障害をもつ男性よりも結婚の機会が多く、障害のない男性との結婚の割合も多かったことが報告されている<sup>(5)</sup>。今日に比べて結婚が女性の生活保障の手段という意味合いを強くもっていた時代において、知的障害のある女性もまた、家事労働や子を産むという性役割を果たすことによって地域で生きる手段を獲得していたことが推測される。

地域共同体が崩壊し家族が小さくなっていくにつれて、知的障害のある人たちは地域や家族によって支えられなくなり、福祉制度が整い知的障害者施設が増えていく中で、昔なら地域で生活していたらう人までが施設の中で生涯を送ることとなった<sup>(6)</sup>。大規模になった施設では入所者ひとり一人の生活よりも集団全体の管理が優先され、男女交際が禁止されたり、性的行動が抑圧されたりした。月経介助の軽減や女性の保護という名目で、本人

の意思の確認が不十分なまま女性の子宮摘出や不妊手術が行なわれた<sup>(7)</sup>ことも知られている。

実際、知的障害のある女性は性的搾取の対象にされやすく、家族や施設職員、職場の同僚などの身近な人たちからの性被害も多い。状況判断の不十分さなどの障害特性に加え、社会や家族からの差別の中で孤独を感じている女性が、男性の優しい態度にだまされ、結果として利用されて借金を背負ったり、性産業から抜けられなくなったり、売春などの犯罪に巻き込まれることもある<sup>(8)</sup>。

このように、知的障害のある女性にとって「性」は地域で生きる手段となってきた一方で自分の生き方を制約するものでもあった。知的障害のある女性の生き方は「性」が周囲の人からどのように価値づけられ、評価されるかによって左右されてきたともいえる。

## (2) 知的障害のある人の性と結婚の権利保障へ

1981年の国際障害者年を契機に、ノーマライゼーションの考えが福祉や教育の理念として掲げられ、知的障害のある人の人権擁護が取り組まれる中で、社会の中にある否定的な知的障害者像や性に対する物理的・心理的障壁と偏見や誤解を取り除き、性と結婚の権利を保障することが課題となっている<sup>(9)</sup>。

従来は、知的障害のある人の結婚の条件として、経済自立や生活自立などが本人に課されてきたが、現在は、本人たちが必要とする支援体制を確立することが求められ、結婚生活や、性教育などを含む男女交際への支援のあり方などが検討されてきている<sup>(10)</sup>。

しかし、性や結婚生活という極めて個人的な事柄であるがゆえに、その支援は多様で広範囲にわたり、現状においては知的障害のある人の直接的な支援にあたる家族や施設職員の熱意と努力に頼っている面もある<sup>(11)</sup>。一方で、親やきょうだいなど知的障害のある人の身近にいる人が彼らの性の自立や結婚に関して消極的であるということが、結婚生活への支援を困難にしている側面もある<sup>(12)</sup>。

知的障害のある女性本人の抱える問題としては、結婚に至るまでの男女交際の機会や性教育の不足

があるうえに、彼女たちが育ってきた家庭における家族との関係や地域社会の中での対人関係において、障害があることを理由に傷つけられてきているという状況もあり、それらが彼女たちの結婚や子育て、さらには地域生活を困難にさせているということもある<sup>(13)</sup>。

このような現状においても、知的障害のある女性本人は男性との交際や結婚を願っており、その願いを実現するための支援を求めているのである。そこで知的障害のある女性の性と結婚を保障することの意義と課題を確認するために、女性本人が抱く、生活や生き方に対する様々な「思い」から、女性のライフスタイルにおける男性との交際や結婚の意味を捉えることを試みる。

## 2. 知的障害のある女性の制約されたライフスタイル～インタビュー調査から

以下では、筆者が行なった知的障害のある女性本人へのインタビュー調査の概要と、対象となった女性の現在およびこれまでの生活の概要を紹介する。

### (1) 調査の概要

#### 1) 方法・手続き

本調査は、道内の3市1町における知的障害者施設、高等養護学校、障害者団体等を通じて、地域生活を送る女性を紹介していただき、本人と家族等の支援者の了承を得て、筆者が個別にインタビューを行ったものである。調査時期は2001年9月から10月で、インタビューは対象となった女性の自室など安心して話ができる場所で行ない、女性の夫以外の家族や支援者などは同席しなかった。質問項目は資料1に示したが、インタビューは自由な雰囲気の中で女性の話の流れに沿う形で実施したため、女性の理解や関心の度合いによっては十分に聞き取れないものもあった。記録にあたっては、女性が話しやすいようにインタビュー中はなるべくメモを取らず、許可を得てテープに録音し、インタビュー終了後に、録音した情報から質問項目ごとに内容を整理した。なお不明な点については、本人の了承を得て、補足調査として家族

や支援者への聞き取りを行なった。

### 資料1 質問項目

#### ①居住地域・住居に関する質問

居住年数／入居経緯／以前の入居先／同居人／間取り／施設設備の状況／自室の所有物／住居についての満足度／将来の住居についての希望

#### ②日常生活の様子に関する質問

平日の過ごし方（生活時間と行動内容）／休日の過ごし方／移手段／収入・小遣い／金銭管理の方法／郵便局・銀行・区役所の利用／テレビ、電話の頻度／買い物の様子／雑誌や新聞などへの関心／単独外出の頻度／飲酒・喫煙習慣／娯楽施設の利用／旅行経験／遊び友達や親友の存在／支援者や支援の状況／生活の楽しみや悩み／生活への満足度と将来の希望

#### ③社会活動に関する質問

近所づきあいの様子／習い事やサークル／同窓会や青年学級／社会経験の様子（冠婚葬祭・年間行事・選挙等）

#### ④家族に関する質問

家族構成／職業／居住地／面会の頻度／家族への心配／家族からの期待

#### ⑤学歴・現在に至る経緯に関する質問

卒業校と入学の経緯／学校時代の思い出／卒業後の進路決定の経緯／卒業後の学校との関係

#### ⑥就労に関する質問

以前の就労先と離職の理由／業務の内容／雇用形態／賃金／休日／職場の人間関係／仕事上の悩みと相談相手／仕事への満足度／就労継続意思

#### ⑦からだや性に関する質問

健康状態／病院の利用／月経・妊娠・出産・避妊の理解と関心／からだに関する悩みと相談相手

#### ⑧恋愛・結婚に関する質問

恋愛・結婚・出産に対する考えや希望／過去

の恋愛・結婚経験について／現在の交際相手（あるいは夫）について／恋愛や結婚などに対する周囲の人の考えや支援の状況／恋愛や結婚に関する悩みと相談相手

#### ⑨自己評価や障害認識に関する質問

療育手帳の有無／障害基礎年金の有無／自分の好きなど嫌いなところ／自分が得意なこと苦手なこと／自分が努力していること／人から注意されること／将来の目標や願い

## 2) 対象者の概要

対象者の属性を表1に示した。対象となった女性は19歳から55歳までの19名で、全員が療育手帳を所持しており、知的障害のレベルはB判定で軽度である。2名が身体障害者手帳を所持しており身体障害のレベルは3～4級で中度である。

結婚している人（以下、既婚者とする）は5名で、うち2名が子どもを育てている。現在、結婚していない人（以下、独身者とする）は14名である。

現在、知的障害者施設による地域生活支援を利用している人は8名で、親や親族などによる支援をうけながら生活している人は11名である。

居住形態では、独身および既婚でグループホームに居住している人が5名で、独身で家族と同居している人が7名、一人暮らしをしている人は2名である。既婚者のうち2名は自分の家族（夫や子）のみで居住しており、1名は夫の親と同居している。

就労している人は17名（うち職場適応訓練中の人が2名）で、食品加工場やクリーニング工場などで一般就労をしている人が12名、3名が作業所などで福祉就労をしている。現在無職の2名も、一般就労の経験がある。1カ月の賃金は、作業所など福祉就労では5千～1万円、一般就労では8万～13万円程度である。なお、17名が障害基礎年金を受給している。

最終学歴では、高等養護学校が最も多く、その他、専門学校が2名、中学校、普通私立高校が1

表1 調査対象者の属性

ケース番号	年齢	結婚の有無	知的障害者施設による生活支援の利用	居住形態	就労の状況
1	19	—	—	親と同居	職場適応訓練
2	21	—	—	親と同居	福祉就労
3	22	—	—	親と同居	一般就労
4	26	—	○	グループホーム	一般就労
5	27	—	—	親と同居	一般就労
6	28	○	○	借家（夫妻のみ）	一般就労
7	29	—	—	親と同居	福祉就労
8	30	—	○	グループホーム	一般就労
9	30	—	—	親と同居	一般就労
10	30	○	—	アパート（夫妻と子のみ）	無職
11	33	○	○	グループホーム	一般就労
12	35	○	○	グループホーム	一般就労
13	38	—	—	アパート（単身）	職場適応訓練
14	41	—	○	グループホーム	一般就労
15	41	—	○	グループホーム	一般就労
16	41	—	—	親族と同居	一般就労
17	46	○	—	夫の親と同居（夫妻と子）	無職
18	53	—	○	グループホーム	一般就労
19	55	—	—	アパート（単身）	福祉就労

名ずつである。

## (2) 制約された生活環境

調査結果から、女性たちの現在およびこれまでの生活の概要を紹介する。彼女たちのこれまでの生活における重要な決定は、親や教員、施設職員などによってなされていることが多い。以下では彼女たちの教育の場、生活の場、就労の場の選択経緯と、そこでの人間関係を中心に示す。

### 1) 教育の場

対象となった女性のうち、「特殊学級」や養護学校等での教育を受けていない人が3名おり、そのうち2名は50歳代の人で、学齢時に知的障害児のための教育制度が整っていなかったため、施設入所により義務教育の機会が奪われてしまっていたり、教員や同級生から理解されずに体が震えるほどのストレスを感じながら普通学級の中で過ごしていた。多くの女性が小・中学校在学時に普通学級から「特殊学級」へ編入しており、その前後で友だちや教員から「いじめられた」「ばかにされた」という体験をしていたり、「友人はいなかった」という人も多い。

教員や親のすすめで高等養護学校に進学した人

では、親から離れた寄宿舎生活となったり、遠距離通学となったものの、同じ障害をもったたくさんの仲間と出会い、自分のできることを認められるという経験を通して、教員や友人との強い信頼関係が生まれている。しかし、卒業後はそれぞれの出身地に戻って就職したり、就労先と生活支援の得られる地域に移動しており、教員や友人と会えなくなるという状況もある。特に卒業と同時に施設を利用している人の中には、居住地からも学校からも離れた場所に移動してきている人が多く、学校時代の人間関係は継続することが難しくなっている。また、結婚や子育て、健康上の理由等で、学校時代の友人との交流が途絶えてしまったことを寂しく思っている人もいる。

### 2) 生活の場

学卒後は、女性たちの就労と生活支援が得られる場が、生活の場（居住地）として選ばれている。その選択に大きく影響を及ぼしているもの一つには家族の状況がある。

知的障害者施設による支援を利用している人のうち4名が学卒後すぐに現在の施設を利用しており、他の4名は、以前の就労先での就労失敗や家

族の死亡などにより現在の施設を利用している。なお、学齢時に親から離れて福祉施設に入所していた人は4名（うち2名が知的障害児施設、2名が児童養護施設）で、そのうち現在も施設による生活支援を利用している人は3名いる。

独身で家族と同居している人のうち、親以外の親族と同居している1名は、親の死亡や入院のため、きょうだいとともに親族の家に転居している。一人暮らしをしている人のうち、1名は自分の意思で家族から独立していたが、1名は母が高齢のため入院して、1人になっている。

女性の多くは、自室の狭さや過ごしにくさ、同居人や家族との関係についてなどの不満をもっていたり、別の場所での生活を願う気持ちをもっていたりする。しかし、施設による生活支援を利用している人ではその不満や願いを支援者や家族に伝えようとせずにあきらめていたり、家族と同居している人では将来、誰から支援が得られるのかという不安を抱いている。

### 3) 就労の場

対象となった女性のうち自分の希望した職につけたという人は少なく、また、13名がこれまでに失業や転職を経験している。その理由には体力的な問題、ストレスによる病気、事故によるケガ、同僚からのいじめ、性的嫌がらせ、物をとったと疑われた、雇用条件の悪さ、リストラなどがある。

女性たちの多くが「一番頑張っているのは仕事」と語っているが、職場においては作業効率を求められる厳しさのうえに、同僚とうまくコミュニケーションできないことによる人間関係の辛さが、彼女たちのストレスを増している。彼女たちが知的障害者であり女性であるということで、差別的な扱いや嫌がらせを受けたことのある人も多い。しかし彼女たちは、生活していくために、あるいは好きなことをするためには働いて収入を得なければならないと強く意識しており、また、職場を選択する自由が少ないことも認識していて、辛くても現在の職場で努力していこうとしている。

以上のように、調査の対象となった女性たちは、「知的障害のある」「女性」であるということで教

育の場や生活の場、就労の場の選択に制約を受け、さらにそれらの場においても周囲の人との関係によっては困難を抱えている。しかし、女性たちはそのような状況を自分で変えようとするよりは、それに耐えながら何か別の楽しみを生活の中に見い出そうとしていた。その楽しみには、趣味や買い物、友だちとの電話やメールなどがあるが、男性との交際というものもある。以下では、女性の交際と結婚の実際とそれに対する願いや期待、不安や不満などの「思い」についてみていく。

### 3. 知的障害のある女性の交際と結婚への「思い」

調査の結果から、女性の交際や結婚に対する意識や態度に関して、独身者と既婚者それぞれについて示す。

#### (1) 独身者の交際と結婚に対する意識と態度

##### 1) 交際経緯と性に関する態度

対象となったすべての女性が、これまでに恋愛や結婚を望む気持ちをもっており、多くの人が男性との交際を経験している。交際相手は学校の同窓生、施設の仲間、職場の障害をもつ同僚、友人の知人などで、その人の生活環境や友人関係のあり方が男性との出会いに影響している。

男性との性的関係に関しては、体のしくみや性行為に関する知識や理解が十分でない女性が多く、興味・関心の度合いや経験の差が大きい。性に対する興味から、あるいは男性からの誘いを断われずに性的関係を持って傷ついていた人、「（セックスは職員から）怒られるから嫌だ」と男性との性行為に対して拒否的になっている人なども見られる。しかし多くの女性は、性に関する知識や興味に関わりなく、結婚や子育てについて考えている。

##### 2) 交際で得られる満足感

特定の男性と交際している人は、1人では出かけられないような場所へ男性と一緒にに行けることの楽しさや、男性が優しく接してくれることの安心感と喜びを感じている。女性たちは、交際相手と電話やメールのやりとりをしたり、互いの仕事

の休日にはデートをして食事やおしゃべりなどを楽しんでいる。なかには互いの家に遊びに行ったり、交際相手が運転する車でドライブを楽しんでいる人もいる。

それに加えて、心を許して何でも話せる相手がいることに満足している人もみられる。「嫌なことがあったら親じゃなくて彼に話す。つき合っている人がいない時はそういうのしゃべれないから。」と家族には言えない悩みや不満を打ち明けていたり、「先生（職員）に話してもあんまりのってくれないし、言おうとしたって先生いないしね。お互いに悩みあったら話し合おうよ、解決するよって。」と施設職員に相談するかわりに互いに悩みを打ち明け、支え合っている様子も見られる。

女性たちの多くは、困った時の相談相手として、親や施設職員、高等養護学校の教員などをあげていたが、施設による生活支援を利用している人では「最近職員も困ったことがあれば相談に乗ってくれないから困る」「言っても自分の考えすぎたとか言われちゃうから言わない」「前は親に（仕事や寮を）やめたいって電話してたけど、もうあきらめた」と、周囲の支援者に自分の悩みや不安を受けとめてもらえないという不満をもっていたり、悩みがあっても誰にも言わずに我慢している様子が見られる。また、友人や親友がいるという人も少なく、「（グループホームで）仕事の悩みは相談しない。みんな自分のことで精一杯だから。」と、仲間同士でも互いに悩みを受けとめあう余裕がないという状況もある。

このような生活状況において、自分の悩みや不満などを打ち明けられる交際相手は、彼女たちの精神的な支えという役割を果たしていることがわかる。

### 3) 結婚への期待～自立の願い

結婚したいと考えている独身者は、結婚によって自分の理想の生活を実現したいと考えている。

「結婚したら子どもができるまでは仕事をして（子どもができた）そのあとはやめたい。他の（本人活動の）会の人で、働いてたら面倒みれないからって、子どもを他の所に預けてて、（子ど

もが）大きくなったら帰ってくるような話を聞いて。（子どもは）ちっちゃい時からじゃないと、なつかないから自分で育てたいと思う。」というように、周囲の人の結婚生活の様子を見たり聞いたりすることで、自分の将来の生活のあり方として結婚や子育てについて考えているようである。

また、現在の生活に対する不満を解消し、家族からの独立を実現するための手段として結婚を考えている様子も見られる。「仕事するのが嫌だっと思うから。今の会社も結婚できればやめれると思うから。」「将来はやっぱりケンカのない家族がいい。自分たちのケンカはさける。」というような仕事への不満や家族への願い、「自分の給料じゃ一人暮らしはやってけないし、結婚して二人ならいいかなって」「結婚したら独立したい。自分たちだけで生活したい。」と結婚によって家族から独立した生活を実現したいという願いを彼女たちは抱えている。そのような願いは、結婚相手として「ちゃんと働いて、給料ちゃんと持ってきてくれる人」である「（障害のない）普通の人」を望む声からも感じられる。「（自分が卒業した高等養護学校の）同級生同士で結婚している人も何人かいるから、（障害者同士でも結婚）できるのかなと思うけど、やっぱり普通の人。私はお金の管理があまりうまくないのでお金の管理ができる人が。」というように、自分の生活能力の不安から、そのことを補ってくれるような男性として「（障害のない）普通の人」を結婚相手として望んでいることがわかる。

対象となった独身者の中では、将来一人暮らしをしたいと考えている人は少なく、誰かと一緒に生活を望んでいる人が多い。その理由としては、「自分の性格が直らなかつたら無理。人に言われないと、部屋の掃除とかルーズになってしまうので。」「世話をしてくれる人がいないと無理。お金のこととか。」と、日々の生活で自分の「できなさ」や支援の必要性を感じていたり、「1人だと、話し相手がいなくて物足りない」「料理はできるけど、ニュースに出ているみたいに知らない男が来て殺されたらって」というように、「女性一人」

の生活への不安を感じているということがある。

これらのことから、結婚して自立した理想の生活をしたという願いの背景にも、女性一人で暮らすのは不安だが、男性と二人ならば安心して生活ができるという期待があると推測される。そして結婚相手に「(障害のない) 普通の人」を望むのは、彼女たちが自分の「障害」を意識して生活の中で不安を感じたり、自分の「どうしてもできないこと」への支援の必要性を感じていることから、一般の女性が男性に経済力を求める以上に強く男性の生活力に期待しているからであろう。このような期待は特に、施設による生活支援を利用していない人に強くみられる。

施設による生活支援を利用している人で、結婚前提の交際をしている人は、互いに支え合えるパートナーとめぐりあい、家族を得ることの喜びを感じていたが、「二人とも働かないと食べていけないから」と共働きを考え「(仕事) やめたら結婚できないよ」と互いに励まし合っている。そして結婚後の生活については「今ここで料理の勉強してるから」と食事にかかわる支援を減らしていきたいという意欲も持っている。

以上のことから、女性が生活の中で感じる不安や、それに対して得られる支援のあり方が、女性の結婚への期待に影響していることがわかる。

#### 4) 結婚に消極的になる理由～不安とあきらめ

結婚したいと思わないという人は、周囲の人から結婚は大変だから無理だと言われていたり、女性が家事負担をするので面倒だと考えている。その背景には、自分の家事能力に自信がないことに加えて、「失敗することあるし事件もあるから。赤ちゃん育てられないからって虐待とか、夫とか妻の暴力とか。」などと、テレビからの情報や周囲の人の話を聞いて結婚生活や子育ての失敗への不安を感じ、結婚を敬遠したりあきらめているという状況がある。

これまで男性との交際経験もなかったし、年齢的にもう結婚は望まないという50歳代の女性は、知的障害児施設退所後に住み込み就労をしていたという人や、学卒後は家庭内で編み物の仕事をし

ていたという人で、男性との出会いや交際の機会が制約されていた。一度お見合いの話があった人もいたが、そのほかには周囲の人から結婚をすすめられることはなく、周囲の人が彼女たちの結婚を積極的に願っていなかったことが推測される。そのような生活環境の中で彼女たちは結婚という夢をしぼませ、男性との交際も遠ざけていたのである。

### (2) 結婚の実際と女性の意識

#### 1) 結婚経緯

対象となった既婚者(5名)および結婚経験者(2名)の結婚経緯には恋愛が多いが、1名はかつて、身内を失ったことで見合い結婚をして地域生活を維持しており、結婚が女性の地域生活を支えていたことが確認された。施設による生活支援を利用している人には自分の親やきょうだいとのつながりがあまりない人が多く、結婚にあたって反対があった人は親と同居していた人の1名のみだったが、結果としては祝福されて結婚している。配食サービスや金銭管理などの支援を受けて他の仲間とともにグループホームで結婚生活を送っている人や、夫の親と同居して家事や子育てについて支援を受けている人もいるが、夫と2人だけで、あるいは夫と子どもだけで生活している人もいる。しかし、既婚者の全員が親や施設職員からなんらかの直接的な支援を受けながら生活しており、現状では特別な生活上の困難は見られていない。

#### 2) 結婚で得られる満足感

対象となった既婚者たちは、夫や支援者となる家族を得たことで安心感をもち、辛いことやできないことがあっても夫と支えあって、生活を楽しんでおり、よりよくしていこうと努力をしている。

共働きをしている人では、「お互いに助け合っちゃって。相談に乗ってくれる人(=夫)ができたから良かった。仕事のこととか話したら、おまえがそれだけ信頼されているんだから頑張れ、と言ってくれたり。」というように仕事の悩みを受けとめ励ましあえることに満足している。また家事を夫に手伝ってもらったり、ビデオデッキの操作などの自分が苦手なところを夫に補ってもらっ

ている人もいる。

夫と一緒に外出できることに満足している人も多く、お金の余裕があれば、休日には車や交通機関を使って外出しており、1人でいる時よりも行動範囲が広がっている人が多い。買い物や外食、カラオケボックスや温泉に行ったり、夫の誘いで日帰りバス旅行や地域のサークル行事に参加したりと、積極的に余暇を楽しんでいる人も見られる。体力に不安のある人でも「ほとんど夫と一緒にきてもらうから」と安心して外出することができている。独身者の中でも、本人活動に参加したり、施設のデイサービスを利用している人は行動範囲や友人関係が広がり満足しているが、そのような組織や行事に参加していない人では、外出先や休日の過ごし方は限られたものになっている。

以上のことから、既婚者は生活の中で夫に心身ともに支えられていることで安心感をもち、夫と共に行動することで生活の中の楽しみが広がっていることがわかる。

また、女性たちは結婚したことで料理や家計の管理などにも主体的に取り組んでおり、工夫をこらしたり楽しんだりしている様子も見られる。夫も女性との生活に安心を感じ、身の回りの世話をしてもらえることに感謝しており、女性が夫との生活の中で自分の価値を感じていることが推測される。

子育てをしている女性は、いろいろな大変さを感じながらも子どもの成長とともに充実感を得ている。子育てをしていることで周囲の人から自分の努力を認められることや、子育てを機に親やきょうだいなどから支援が得られるという心強さから、意欲と自信が高まっている様子も見られる。

また、将来は夫の親と一緒に、あるいはその近くに住みたいという人も多く、どの女性も帰省したときに夫の親が自分たちを喜んで迎えてくれることを語り、年老いた親の健康を心配している。特に、施設による生活支援を利用している人では、子どもの頃から親と離れて暮らしていたり、自分の親はずでに亡くなっていたりしている人もおり、

夫の親が息子の嫁としての自分を頼りにして、大切にしてくれているということが、自信を高めているようでもある。

以上のことから、結婚によって夫や子ども、夫の親という家族を得ることで、それらの対人関係の中で女性の自尊心を高めて、生活への意欲を増す契機となるといえる。

### 3) 結婚生活の不安と不満

既婚者たちは、結婚生活により様々な満足感を得ているが、生活への不安や不満がないわけではない。特に子育てに関することや、自分の自由な時間が少ないことへの不満を持っている人が多い。

施設による生活支援を利用している人は、施設職員と相談してピルや子宮内避妊具を使用して避妊しているが、本当は子どもが欲しいという願いもあり、現状に不満を感じている様子が見られる。しかし、実際に自分が子どもを育てることには、自分が働き続けなければならないことを考え「仕事をして子どもを育てていくのは不安かな」と思っていたり、「作っても育てられるかどうか。最後まで責任もたなきゃいけないでしょ。」と自分の養育能力に不安を感じている。また、「産まれてきた子どもが障害もっていたら困るし」と自分の障害の遺伝を心配する人もいる。

子育てをしている人では、子どもの教育や将来の家計について不安を感じている様子が見られる。就学前の子どもをもつ人では、子どもの友達の親や教員などに自分の障害がわかったら、子どもがいじめられるのではないだろうかという心配をしている。高校生の子どもをもつ人では、子どもの就職や結婚について心配しており、同居している夫の親が高齢になってきたこともあってこの先の支援についても不安を感じている。

以上のことから、彼女たちの子育てに対する意識や態度に、彼女たちの障害認識と周囲の人の支援のあり方が影響していることがわかる。

既婚者が不満に感じていることにはまた、「(夫といると)自分の好きなことをする時間がなくなった」「(結婚して子育てをしているので)友達と遊

べなくなった」というものもある。独身者の多くは個室をもっており、在宅時には自室でのんびり気ままに過ごしたり、趣味に取り組む楽しみも持っているが、既婚者の場合は夫や子どもなどの家族と一緒にいる時間が多く、自分一人で過ごす時間は少なくなっている。

既婚者は「料理を習いたい」「(高等養護)学校でやってみたくてミシンで洋服を縫ってみたい」などの自分の能力を発揮することや高めることへの願いや、「パッチワーク教室に通いたい」「(子どもが手を離れたら)仕事に行きたい」「もっと外に出かけるようにして、世間のことを知った方がいい」など、社会参加や人間関係を広げることへの願いをもっている。この願いが実現されない理由には、障害や生活の場による制約や自分の願いを実現する方法を身につけられなかった生活歴などがあると思われるが、それに加えて既婚者では現在の生活で夫や子どもと一緒にいる時間が長いことによる制約も感じられる。

以上のことから、夫や家族との関係や、得られる支援のあり方によっては、女性は結婚によって自由が制約される場合があることがわかる。

#### 4. まとめにかえて

インタビューの中で語られた女性たちの「思い」から、女性たちにとって、男性との交際や結婚には、自分の生活の中に楽しみや充実感をもたらす、生活への支えも得られることで、自信と意欲を増すという意味があることが示されたが、一方で交際や結婚に対する不安やあきらめもみられた。これらの背景には、過去や現在の生活環境における自由の制約や、女性たちが自分の障害を意識することで生活の中で不安や不満を感じているという現状がある。

彼女たちの生活の中にある問題は、自分の能力と性に対する不安、人とのコミュニケーションがうまくできないことと周囲からの差別や偏見などに加え、女性自身の家庭環境、教育や生活における支援、居住地域の社会資源などの影響が絡み合って生じている。彼女たちには、思うようにならな

い生活や対人関係の中で、自分に対する自信をなくし、不安を増すという状況がある。

知的障害のある人たちが集い、語り、支え合う人間関係を作り、行動を広げる役割を果たすものの1つとして、本人活動の場が注目されているが、そのような特別な場ではなく、知的障害のある女性の日常生活の中にある支えとして大きな役割を果たすものには、恋人や夫、結婚生活=家庭や家族といったものがあることが調査から示された。

家族とのつながりが弱く、友だちや職場の同僚などとの良い出会いが得られなかった女性たちにとっては、夫や恋人との関係は、女性たちのこれまでの人生の中で、最も信頼でき、安心できる関係となり、女性としての自分の価値を感じることでできる関係となる可能性をもっている。そして、結婚によって得たパートナーは、彼女たちの人生を支える支援者というだけでなく、共に人生を歩む同志であり、彼女と同じく、周囲に対して必要な支援を求め、理想の生活を実現するために努力する人生の主人公となるのである。知的障害のある人にとって、支援する側、支援される側と固定された関係でなく、共に歩むという関係であるパートナーを得ることは、「かけがえのない自分」を確認することにつながり、人生を明るくし、生活意欲を高めることだろう。このようなパートナーという役割はこれまで知的障害のある女性の人生にかかわってきた親や支援者では果たし得ないものだと思われる。

しかし一方で、「結婚して自由がなくなった」という不満をもつ女性がいたように、女性にとっての交際や結婚は、恋人や夫への依存や拘束を招く側面も持っている。また、男性との性的関係で傷ついている人もいたように、男性との交際や結婚は女性を傷つける恐れもある。人間関係が狭く、心を許せる相手が少ないという生活状況にあって、夫や交際相手という存在は彼女たちの生活に強い影響力をもつことは調査から示された。したがって、男性との交際や結婚により女性の生活が制約されたり破綻する危険もあるといえる。

また、男性との交際や結婚は女性の生活上の不

安や不満をすべて解消するものではない。独身者の結婚への期待には、自立と生活の安定への願いが込められていたし、既婚者は健康や住居、就労、経済面に関することや、家族や子育てに関することに不安や不満を感じていた。また自分の自由と能力の高まりへの願いも抱えていた。このような彼女たちの「思い」を受けとめ、充実した生活が送れるような支援や、自由や自信を高め、女性の自己実現が達成されるような支援が必要とされているといえる。

したがって、知的障害のある女性は交際や結婚によって、自由を得たい、「かけがえない自分」を感じたいという願いを実現し、ライフスタイルを向上させて自らを発達させる契機を得るが、女性一人ひとりの自己実現と安心できる生活のためには、彼女たちが結婚や交際により得たパートナーや家族の外につながる人間関係による支えが重要だといえるだろう。

## 謝 辞

本調査を行なうにあたり、ご協力、ご助言いただきました施設、通勤寮、高等養護学校等の職員の皆様、快くインタビューにご協力いただきました女性の皆様とその家族や支援者の皆様に感謝を申し上げます。

## 注・文献

- (1) 近年、身体障害者を中心に女性障害者の抱える問題やニーズについて研究がなされている。主なものは以下の通り。岩田直子「女性障害者の自立に関する一考察～全身性障害をもつ女性障害者の事例を通して～」日本社会福祉学会『社会福祉学』、1995、109-125頁、伊藤知佳子「子どものある既婚女性障害者の抱える問題・ニーズに関する一考察—聞き取り調査から—」『日本福祉大学社会福祉論集』第102号、2000、41-54頁、秦安雄・伊藤智佳子・橋本尚美・石川京子「女性障害者の自立支援をめぐる諸問題（その1）」『日本福祉大学福祉論集』第104号、2001、127-161頁。
- (2) 平山（1985）は①障害者が社会的、性的行動の

訓練を受ける権利、②障害者がその人の能力に応じて理解できるすべての性に関する知識を得る権利、③性的満足感を含めて異性を愛し愛される喜びを味わう権利、④健常者が社会的に受け入れられている形で表現するのと同じ方法で、自分の性的ニーズを表現する権利、⑤障害者も結婚する権利、⑥障害者が子どもをもつかどうかを決定する上に自分の立場を述べる権利、という6つの性的権利を擁護することにより、障害者が社会の一員として生活を送る市民権が保障されるとしている（平山尚『障害者の性と結婚』ミネルヴァ書房、1985、98-101頁）。

- (3) 知的障害のある男性は、性暴力の加害者として、性的欲求を制御できない存在として社会から恐れられ、抑圧されてきた（平山尚『前掲書』ミネルヴァ書房、1985、74-79頁）。結婚に関しては、女性よりも男性の方が事例が少なく、知的障害のある男性の結婚が困難な状況にあることも報告されている（注5参照）。また近年、障害をもつ男性の性産業の利用などがオープンに語られるようになってきているが、その支援のあり方についても課題となっている（“人間と性”教育研究協議会・障害児サークル『障害児（者）のセクシュアリティを育む』大月書店、2001、114-115頁）。
- (4) 近藤原理「精神遅滞者の性意識と性行動——共同生活を通して思うこと」『発達障害研究』第7巻第1号、1985、29頁。
- (5) 大場（1985）の全国通勤寮を対象にした「精神薄弱者の結婚」調査によれば、1985年現在、171事例が把握され、そのうち73%が女性を占めており、男性の配偶者の7割が同じ障害をもつ人であったのに対し、女性の配偶者の25.6%は健常者であった（大場茂俊「精神薄弱者の結婚と家庭生活」『発達障害研究』第7巻第1号、1985、32-33頁）。また、日本知的障害者福祉協会地域福祉委員会の調査によると、1999年10月現在、国の制度に基づいた生活支援センターの支援登録者1951名のうち、結婚家族は340名、17.4%だった（日本知的障害福祉連盟『発達障害白書2001年版』日本文化科学社、2000、135頁）。なお、知的障害児（者）基礎調査（厚

生労働省)によると2000年9月現在、18歳以上の在宅知的障害者221,200名中、「夫婦で暮らしている」は2.4%で、将来の生活の場の希望では「夫婦で暮らしたい」が11.0%だった。(平成12年「知的障害児(者)基礎調査結果の概要」厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部、2001、<http://www.mhlw.go.jp/houdou/0109/h0919-3.html>)。

- (6) 近藤原理「前掲論文」『前掲書』1985、29頁。
- (7) 中村健二「性と結婚 実践記録・生きる」『精神薄弱』4、ドメス出版、1975、河東田博「性の権利と性をめぐる諸問題」松友了編著『知的障害者の人権』明石書店、1999、126-134などを参照。
- (8) “人間と性”教育研究協議会・障害児サークル『前掲書』大月書店、2001、114-115頁、安彦ひさ子『知的障害のある人の性とその周辺を理解する』全日本手をつなぐ育成会、2000など参照。
- (9) 河東田博・河野和代「知的障害とセクシュアリティ——子宮摘出問題と結婚生活援助のあり方を中心に——」平成5年度厚生省心身障害研究『心身障害児(者)の地域福祉に関する総合的研究』、1994、147頁。
- (10) 山本良典「知的障害をもつ人々の『性』と『結婚』をめぐって」“人間と性”教育研究協議会

『Human Sexuality』19号、1995、49-50頁。

- (11) 秦安雄「知的障害者の地域生活支援に関する研究——知的障害者の結婚と子育て支援について、ゆたか福祉会の事例から——」『日本福祉大学社会福祉論集』第103号 2000、1-52頁。
- (12) 安彦ひさ子『知的障害者子育て支援研究事業 子育て支援の課題』全日本手をつなぐ育成会 2000。
- (13) 山崎美貴子・稲垣美加子・佐野真紀他、「知的な障害をもつ母親の子育て支援の諸相(4)——処遇困難ケースの質的分析への試み——」(明治学院大学社会学部附属研究所『研究所年報』31号、2001、215-223頁)によると、母子生活支援施設などで生活している知的障害のある母親は原家族との関係が良好なケースは少なく、彼女たちの結婚や出産が契機となって関係が悪化した場合もあり、支援が得られない状況にあった。また、彼女たちはパートナーを含む家族や社会的差別に起因する心理的外傷体験をもっていたり身体的暴力を受けており、そのことによりさらに人間関係や就労への適応や、子育てに関する困難を抱えていたことが報告されている。

(北海道大学教育学研究科修士課程)